

気仙沼プロジェクト（8月20日～25日）活動報告

参加大学

東北学院大学、桜美林大学、明治学院大学、名古屋学院大学、関西学院大学、広島大学、龍谷大学、近畿大学、摂南大学 以上 42名(うち10名は23日まで)

1. 作業内容

瓦礫撤去、写真洗浄、古美術品修復、アンカー（土嚢袋に砂利を詰めたもの。定置網漁等に使用）作り、流出した本のリスト作成など

※参加者全員（リアスアーク組以外）日替わりで休憩グループを設けた。休憩グループは気仙沼の被災地の見学をした。

<民家の瓦礫撤去> 天理教、RQと活動

- ・バケツリレー形式で瓦礫をトラックに積み込む作業を行う
- ・瓦礫に釘が大量に刺さっており、大変危険。皮手袋は必須
- ・埃が多い場所があるので、マスクとゴーグルの必要性を感じた（ただし、非常に蒸れるので安全面との兼ね合いが難しい）

<写真洗浄>

- ・宿泊所の隣の体育館での作業
- ・服装の指定がないので何か忘れ物をした人や体力に自信がない人におすすめ
- ・喜んでくれる人のいる、やりがいのある仕事。一度は経験するとよい
- ・作業中に話過ぎると集中力が途切れるので注意

<アンカ作り>

- ・土嚢袋に砂利を詰める作業。（定置網漁等に使用される）
- ・力仕事メインなので、男子の数がある程度必要（細かい作業もあるので、女子でも可）
- ・女子は自分のできる仕事を積極的に見つけること
- ・軍手、絆創膏は複数用意したほうが良い（軍手は滑り止めつきがよい）
- ・腰と指を非常に痛めやすいので無理は厳禁
- ・流れ作業なので声掛けが大事
- ・クレーンがある現場なので、ヘルメットの装着が必要
- ・漁師の方々とはコミュニケーションがとりやすい（おもしろい!!!）
- ・滑り止め付きの軍手だけでは作業がし辛いので、ゴム手袋を軍手の上から着けると良い

- ・女子にも絶え間なく作業があった
- ・他のボランティア団体との交流や情報交換ができた
- ・男子の作業はマメができやすいので注意

<リアスアーク美術館での漁業関係文化財の洗浄>

- ・体力は必要ないが集中力、精神力は必要
- ・現地の人との交流を通して震災について考えることができる
- ・仕事によって難易度があるので自分たちができることをしっかり見極めることが大切
- ・現地の人々の想いは様々なのでコミュニケーションに当たっては配慮が必要
- ・洗浄用の浴衣と袴を使って、畳み方を教えてもらえた
- ・一緒に作業していた方が毎日お弁当を作ってきて下さった
- ・現地の方と少しずつ親しくなり別れがとても惜しかった
- ・この作業で扱っている物が発見された場所（気仙沼市街地）を見学した

<流失した本のリスト作成>

- ・デジカメを使って 8000 冊の本のリスト作成
- ・作業前、現地の人に震災当日の状況についての詳しい話を聞くことができた
- ・この作業は今クールで終了したので、おそらく次のクール以降は行われたい

※注意したいこと

- ・作業は自分の70%ぐらいの力でやるほうが良い（自分の体力を考えて）
- ・少しでも調子が悪かったら休む
- ・外の作業は荷物を置く場所がないので雨対策として大きなビニールがあると良い
- ・他団体との共同作業もあるので、コミュニケーションをしっかりと取ること
- ・外の作業は飲み物を多めに準備したほうが良い

2. 生活面について

- ・食費：1人1000円（残金は被災地支援募金へ）
- ・休憩班や写真洗浄班が炊事当番をした
- ・共同生活なので、片付けなどは積極的に行うべき
- ・天候によって気温の差があるので、寒暖に対応できる服装の用意が必要
- ・現地の人のお話や自分の考えの変化などをまとめるためにも、メモや日記を書く
くと良い
- ・学生が主体となり生活ルールやミーティングを行った

3. 活動を終えて

今回のクールは明学生 6 人が参加しました。毎晩行われる全体ミーティングの終了後、明学生だけで集まり比較的フランクなミーティングの時間を毎日設けました。特に最終日は「なぜボランティアに参加したか、今回の活動で何を感じたか」などを熱く語り合い、とても貴重で刺激的な時間を過ごせたと感じています。

以下、一人ひとりの感想です。

私がボランティアに参加したのは今回が初めてで、参加した理由は二つあります。一つは、ただ単純に少しでも復興のお手伝いができればと思ったからです。もう一つは、震災が起こりテレビで津波や被災地の様子を見ても、これが本当に同じ日本で起こったことなのかと正直全く実感がわからず、実際に自分の目で見てみないとわからないと思ったからです。

最近ではテレビ等のメディアで取り上げられるのは原発のことばかりで、被災地の様子が報道されることはほとんど無くなってしまったように思います。そのせいか普段の生活の中で震災の話題が出ることも無くなってしまいました。出発の日にテレビで「私たちはあの日を忘れない」といった震災の特番の CM を見たのですが、なんだか震災が過去の出来事にされてしまっているような気がしました。実際に津波の被害にあった地域を見て、震災直後よりも片付いてきたとはいえ、まだ復興とはほど遠い状態で言葉が出ませんでした。

震災後 mixi のコミュニティ等で被災された方のコメントを見ていたのですが、「ボランティアに来てくれるのは嬉しいが、その人達には帰る家がある。ボランティア活動が終わればまたいつも通りの生活に戻る。帰る家が無くなってしまった自分たちとは違う世界の人間のように感じる。本当に辛さや痛みを共有できるのは被害にあった人だけ。」というようなコメントがありました。確かに私が被災された方の気持ちを完全に理解することはできないし、当日のことを思い出させてしまっただけではいけないと思い、地元の方たちとのコミュニケーションは必要最低限にして、ただ淡々と与えられた作業をするだけでいいと考えていました。また、夜のミーティングも事務的な連絡だけで終わることに疑問を感じませんでした。

しかし李さんの話を聞いてから、今回の活動を通して感じたことをメンバー同士で話し合ってみたりしましたが本当に十人十色でいろいろな意見があり、自分では思いつかなかった考えを聞けてとても刺激になりました。ほとんど話せていないメンバーもいたので、五泊六日ではとても足りないです。また、本のデータベース化のボランティアに行った時、

本の持ち主の方が涙を流しながら震災当日の様子を話して下さいました。私たちがいくら泣いても何もならないので泣きたくはなかったのですが、涙が止まらずただ黙って聞くことしかできませんでした。本の持ち主の方は、二度とこのような悲しい出来事が起こらないようにたくさんの人に伝えたいし、話を聞いた私たちも帰ったらたくさんの人に伝えてほしいとおっしゃっていました。ここに来た以上、私たちが見聞きしたことや感じたことをたくさんの人に伝えるべきだと思いました。

現地の方は精神的にも体力的にも限界を超えているだろうと思います。仕事が無くなってしまい収入が無いのにも関わらず私たちに差し入れをして下さったり、話しかけて下さったりと本当にあたたかい方ばかりでした。それに比べて震災直後の買いだめなど、自分たちのことしか考えていなかったことを思い出してとても恥ずかしくなりました。

本当に濃い一週間を過ごさせていただきました。ボランティアに参加した理由は違いますが皆とてもモチベーションが高くていい刺激になりました。太安君も言っていましたが、何事も行動に移すことが大事だと思います。自分の中で考えているだけでは、やっていないのと同じだと思います。これだけで終わりにするのはもったいないので、絶対にまたボランティア活動に参加します。その時は自分のボランティアにならないよう初心を忘れずに活動したいです。

もっと書きたいことがあるのですがうまく言葉にできずもどかしいです。最後にこのような機会を与えて下さったボラセンの方々をはじめ教職員の方々や現地の方々、メンバーに感謝します。またメンバーと集まりたいです！できればまたボランティア活動を一緒にしたいです！

法学部 齋藤

震災がおこってから、私は映像などで被災した状況をみたりして何か自分にできることはないか、そして実際に現地へ行ってできることがあるのではないかと考えていました。また友達が震災ボランティアに参加した話を聞くことができ、そういったことからこのボランティアに参加することを決めました。

映像だけでも本当に現実におこったことなのだと理解できなかったけれど目で見ると被害はより大きく感じました。そんななか、話すときを思い出して辛いのに泣きながら必死に私たちに自分が経験したことを伝えてくださりました。そのとき一番辛かったのが、返す言葉がなかったこと。頭の中にたくさんの感情があったのにそれをうまく伝える表現がありませんでした。ただ泣きながら頷くことしかできなかったです。

実際作業するにあたってあなたたちのおかげでまた仕事ができる、と言ってもらえて本当にうれしかったです。また自分のこれからの軸というのを見つけることができたと思います。

一回だけでは勿体ないので、また唐桑に行きたいです。他大学の方との交流もあり、モ

チベーションが高い方ばかりで刺激も受けました。

横浜に戻った今、自分が経験したことを友達や家族に話しました。自分がこうやって話すことでボランティアに行きたいと思う人が増えたり、現地の状況を少しでもリアルに伝えることができたらいいなと思います。

まとまりない文章になってしまいましたが、このボランティアに参加してたくさんのごことを知れたし、成長させてもらえたと思います。ありがとうございました。

経済学部 宇田川

今回のボランティアで一番感じたことは、やっぱり人間には十人十色、色んな考え方があるという事です。ミーティングの時によく出てきた「自分のためのボランティア」というキーワードがありましたが、自分はそういう形になってもとりあえずボランティアに参加することが重要だと思っていました。でも日詰さんや末松さん、名古屋学院の学生など、前にボランティアに行ったことがある人の意見を聞いていると自分の考え方は浅はかだったんじゃないか、とか思いました。でもボランティアの定義ってというのは曖昧で人それぞれの考え方があるのでどれが真の答えかはわからないと思います。だからこそ日詰さんが最終ミーティングの後にやった「ボランティアを始めたきっかけ」とかをみんなで共有するのはすごくいい方法だったんじゃないかなあと思いました。それを全体のミーティングでもできればもっと良かったのではないかなと思いました。

経済学部 太安

私は今回の気仙沼プロジェクトにおいて、主に瓦礫撤去や船のアンカー作りなどのハードワーク系の仕事に取り組みました。その中で、ひとつの民家、ひとつの漁港を元通りにすることがいかに大変なことかということをも身をもって知ることとなりました。それでもたった一週間のうちに瓦礫が減ったり、アンカーの土嚢が積みあがったりなど小さな前進も感じ取ることができ、ある程度の達成感も生まれました。

震災以降、テレビで見ていると「徐々に復興しているようだな」と漠然と思いますが、当然のことながらそれは被災した方々自身や多くのボランティアが日々努力しているのであって、自然に復興しているわけではありません。マイナスから0の状態まで戻すのは容易ではありませんが、これからも私は被災した方々がまた再出発できるように継続して支援していきたいと思ひますし、その中で自分自身も人として成長していけたらなと強く思ひます。

法学部 妹尾

気仙沼プロジェクトで「想像すること」「相手に配慮すること」の2点を学びました。

まず想像とは、割り当てられたボランティアを作業するうえでただ黙々と作業するだけでなく、地震や津波の被害に遭った方々の以前の生活を想像したり、現在は元気で生きていらっしゃるのか、また今どんな想いで生活しているのか、といったことを思いながらやるということが大切なのではないかと思います。

また想像することで、同じ作業にも気持ちが入り、より丁寧に効率よく出来るのではないかと思います。

次に相手に配慮するという事とは、今回の大地震で被害に遭われた方々は様々な気持ちで日々を送っていて、その気持ちは個人によって異なるので一人一人にあった接し方が必要だということです。この震災の記憶を広く伝えていくことを願う人、それを嫌がる人・・・ボランティアを「体験、被災現場見学」と捉えられ否定的に考える方もいらっしゃるかもしれません。考えれば震災前の静かな気仙沼の街に多くの人が入ってくることは、現在もそこで生活している方々（自宅、仮設住宅、避難所等）にとって居心地の良いものではないと思います。

ですので、ボランティアとして入る私たちはとても慎重に他への配慮をしなければならぬと深く思います。そのために、私としては「ボランティアのためのボランティアになってはいけない」とをいつも心においていました。ボランティアとして個々に目的を持つことは大切なことですが、そればかりの達成に目が向いてしまわないように気をつける必要があります。

またそのほかに今回は明学生をはじめ、他大学からとても刺激をもらい個人としても成長できるプロジェクトでした。今回ここに書かせて頂いた2点を気づかせてくれたのも、一緒に参加していた学生です。

本当にこの気仙沼プロジェクトの6班に参加できてうれしく思います。

経済学部 末松

私は今回リアスアーク美術館で漁業関係文化財の洗浄作業を4日間行いました。家族、家、仕事を失った方たちとの作業であったため、言動には十分に配慮しました。現地の方6人と学生4人の計10人のとてもアットホームな雰囲気でしたが、初日はほとんど会話がなくて終了しました。何を話したらよいか、当時の話をされた時なんと返答すればよいか悩み過ぎてしまったため上手く話をする事ができませんでした。しかし日を重ねるにつれ現地の方と距離が縮まったように思います。お昼を一緒に食べたり、昆虫採集をして遊んだり、料理のコツを教わったりすることでとても楽しい時間を過ごしました。そして作業最終日には「楽しい時間をありがとう」という言葉を頂き目に涙を浮かべながら私たちを送り出してくれました。

私はここへボランティアに来て、自分に何ができるのか、現地の方にどう思われているのかすごく不安でした。しかし最後の言葉を聞いて、私たちと働いたことで現地の方が少しでも楽しい時を過ごせたのだと分かり心からよかったですと思いました。しかし現地の方がどんな想いでいるかを理解することはやはりできません。それが本当に辛く感じました。

瓦礫撤去のような力仕事も当然必要なボランティアですが、今回のリアスアークでのボランティアも復旧、復興には不可欠な活動であると思います。

私は以前他のボランティアでヘドロ掻きだし作業をした際に、いかに自分が無力かを痛感したことがあります。体力が続かずとてもハードでした。それをきっかけに、私には私にできるボランティアをしようと感じ今回の気仙沼プロジェクトに参加しました。

活動を終えて振り返ってみると私なりのボランティアができたかなと思います。メンバーが言っている通り、人それぞれボランティアに対する想いは異なりますが、現地を少しでも良くしたい、力になりたいと思う気持ちは一緒だと思います。その想いはきっと現地の方に伝わっているし、復興を少しでも早められるのではないのでしょうか。

最後に、こんな頼りないリーダーですみませんでした。みんなが積極的に行動してくれて本当に心強かったです。李さん、波多野さん、現地でサポートして下さった教職員の皆さん、そして明学のみんな、ありがとうございました。感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

経済学部 日詰